報告──2009年周作クラブ新年会

賑やかに、イベントの幕開け

遠く弘前から、名古屋から65人が集う

乾いた好天が続いていた東京の空に、ときならぬ寒中の嵐が吹き荒れたのは1月31日、何とその日が周作クラブの新年会でした。幸い雨のピークは早めに過ぎ、如水会館3階の会場には、12時半の受付時間も待ち遠しい参加者の、晴れやかな笑顔があふれました。

風邪をおして、強風の首都高を自らハンドルを握ってご参加下さった順子夫人は、「家族に30分だけと約束して参りました。5月に浅草でお会いするのを楽しみにしています」と、高橋千劔破幹事の開会宣言直後、短い挨拶をされて退席なさいました。加賀乙彦会長の挨拶は定番の「皆さん、今年も大いに遊びましょう」。会場の笑い声と裏腹に会長の表情は心なし寂しげで、「私事ですが昨年の11月、突然に女房が亡くなりまして」。その後、身辺に起こる怪奇な現象を語り、「女房は天国への道を必死に歩いている頃。悪戯をする余裕はない。それに今日のこの雨。雨を降らせる人は遠藤さん、悪戯はやはり遠藤さんの仕業でしょう。遠藤さんも女房も天国へ行ったけれど、私は行かれるのだろうか」。天国行きの為のユニークな話題が続きました。

出席者全員で

乾杯の音頭は黒井千次顧問。「乾杯の前に一言。加賀さんは天国へ行けないと私は確信します」。会場は再び笑いが渦巻く。黒井顧問は最近読んだ『編集者魂』と云う本から、遠藤先生に関する話題を興味深く紹介した後、「天国に行けない人達の、逝く日が遅いことを祈念して乾杯」…と云う訳で、その後にも天国談義に花が咲きました。お待ちかね、お昼です。豊富に用意された料理は和風、洋風。思い思いに選んだ料理に舌鼓を打ちながら、歓談のひととき。大広間の両サイドに沢山あった料理が、大方皆のお腹に収まった頃合いを見計い、高橋幹事から五月に予定されている「原点の旅」の説明があって、さあ後半のスタートです。司会のマイクはエンターテインメント担当の亀岡園子さんにタッチされ、先ずは今や恒例になった後藤徹哉さんのギターの弾き語り。「富士の山」「いつでも夢を」の2曲を会場の皆と一緒に熱唱しました。今年の新年会では「初参加です」と添え書きのある返信が目立ったそうで、初参加の13名と、遠く弘前市からご参加の吉田豊さん（『医者がみた遠藤周作』の著者）の自己紹介がありました（次頁に）。

ビンゴ・カードが配られ、本日のメイン・イベントの始まりです。「Nの38．G51…実に軽妙洒脱にゲームを進行させる亀岡さん。老いも若きも手元のカードに集中し、会場は弥が上にも盛り上がります。工夫を凝らしたゲーム運び、誰にでも賞品が行き届くとびきり楽しいビンゴでした。会も終盤に近く、挨拶に立たれた遠藤龍之介さんから贈られた、まさに抱腹絶倒の三つの逸話から、紙面の都合で一つだけ紹介します。──小学校5年の修学旅行での夜のこと、友達と楽しく騒いでいるとホテルの主人が来て「遠藤君はいますか？　寝る前に必ずトイレに行くように」と。不思議だったが、その訳は父が書き送った〈裏磐梯高原ホテルのご主人様　D組の遠藤龍之介の父でございます。息子は毎晩寝糞の習慣があり、ご迷惑を掛けるかと一筆認めました〉と云う葉書だった。後で主人から見せられ得心したのでした。──「今日のパーティはギターありビンゴありで、本当に楽しかった。父もきっと大喜びでしょう。どうも有難うございました」龍之介さんの締めで閉会しました。この日、遠藤先生を共に慕い集う人々の心には、ひと足早い春が訪れていたようです。

（金子コウ）

「いつでも夢を～」歌声は会場いっぱいに